表現力を育てる小学校社会科学習指導の工夫

－協同学習と「なりきり活動」を取り入れた資料活用能力の育成を通して－

須田　恵美

（児童支援コース　14502006）

1　問題

（1）各種調査の結果から

児童の実態をとらえるために、①特定の課題に関する調査（社会）②ぐんまの子ども基礎・基本習得状況調査（社会）③置籍校における平成27年度全国学力・学習状況調査（国語）の調査を抽出し、課題を分析した。③の調査については、社会科における調査ではないが、複数の資料を関連させ自分の意見を述べる調査問題は社会科の学習と重なる部分が多いため、児童の実態をとらえることができると考えた。

これらの調査の結果から、社会科における児童の課題は「資料から情報を読み取る力」「自分の考えを、資料をもとに表現する力」「課題に対する具体的な解決策や、取り組みを表現する力」の３点であることがわかった。

（2）学習指導要領から

小学校学習指導要領社会科（文部科学省，2008）においても、言語活動は非常に重視されている。「調べたことをもとに、児童が言葉で表現する活動を通して理解を深めていく」言語活動を授業で活用していく必要がある。

2　本研究の仮説

本研究では、協同学習の原理と「なりきり活動」を活用した授業の中で、児童が資料活用方略身に付け表現し指導者がそれを適切に評価する授業を実践し、その有効性を検証する。

3　本研究における課題解決に向けた手立て

（1）資料活用方略

先行研究などから、社会科において児童の表現力を育成するためには、資料の有効活用が重要であることが指摘されている。各種資料を読み取るための技能的な側面に注目し、具体的な資料活用方法を「資料活用方略」とした。「資料を読み取って表現することができない」課題を解決するためには、児童が具体的な資料活用法を知ることが有効である。具体的な資料活用方略を「資料を①比較する、②関連付ける、③資料活用をもとに歴史人物になりきる（なりきり活動）」とし、これらの活動を児童に意識付けながら実践を重ね、資料活用能力を身に付けさせることを目的とした。

（2）自分の言葉で伝え合う学習

「自分の考えを表現することができない」という課題から、児童が自分たちの考えを伝え合う方法を知ることが必要だと考えた。表現力を高めるためには、表現し合う場を設定すること、お互いの意見を言い合える環境があることが重要であることが先行実践等でも明らかになっている（吉永，2008；小西，2010）。そこで言語活動を充実させ、表現力を育成するために「協同学習」を取り入れ学習を進めていく。

（3）表現を具体化する「学習の構造化」

実際の授業において、資料活用方略を用いて児童が学習する際に、何を資料から取り出

し、表現し、伝え合うのかという「学習のめあてと内容」を教師が具体的に設定しておく必要がある。学習のめあてと内容を教師が的確に設定し、学習内容を構造化させることにより、各単元が問いと答えの関連で構成されるようになる。それぞれの単元において、児童に捉えさせたいことを児童自身に表現させる活動を積み重ねていくことによって、社会科がわかるようになり、表現力がついていく。

（４）表現力育成のための段階的指導

本実践研究では表現力「記述・解釈・説明・判断」の４つの要素（文部科学省,2008）を岩田（2008）を参考に表１のように設定した。社会科において読解力を育成し、表現力を育成するために、各単元でそれらの要素を指導者が意識し児童が資料をもとに表現活動をしていくことが、児童の表現力を高めるための手立てとなる。

段階的指導

記述	事実の特質や事象、出来事の過程をありのままに秩序正しく記載する。
解釈	事象間の関係を読み取る。情報を他人に伝えるため再構成する。
説明	理由をつけてよくわかるように物事を読み解き表現する。
判断	他者に対して、自分の考えを論理的に説明する。

表１　表現力の段階的指導

（５）ルーブリックの作成「歴史博士のルーブリック」

本実践研究では、「歴史博士のルーブリック」（図１）というものを作成し、予め評価基準（ルーブリック）を児童に示し具体的な表現方法を児童が学びながら学習を進めていった。このルーブリックに沿って指導者が授業後評価することで、児童の「考えたことの、言語などによる表現力」が適切かどうか評価することができる。また、表現活動の前に教師がルーブリックを児童に示すことで、児童は自身の表現の自己評価と振り返りができるという利点がある。

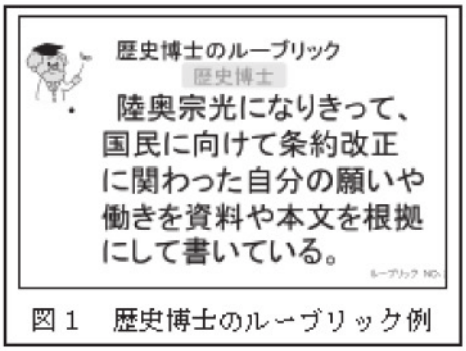


図１　歴史博士のルーブリック例

（６）ポートフォリオ評価「こつこつカード」

本実践研究では、児童が単元を貫いた学習ができるような手立てとして、一枚ポートフォリオ（日部・山口・石川，2012）を参考にした「こつこつカード」（図２）を作成した。本カードは年間を通して同じ形式で行うことで、児童の表現力を書く活動に慣れさせながら高めることができる。また児童がそのポートフォリオを見返すことで、学習の振り返りができることにも特徴がある。授業では、まず単元を貫く課題を解いていく概念探求型の授業設定し、次に「学習の構造図」を活用し中心概念との間にある具体的概念の問いに対する説明を各小単元で帯活動として行っていくことで、基礎となる用語や語句を獲得できるようにする。最後に、その関係を児童が再構成し最終的に説明しながら中心概念を獲得していく構造である。

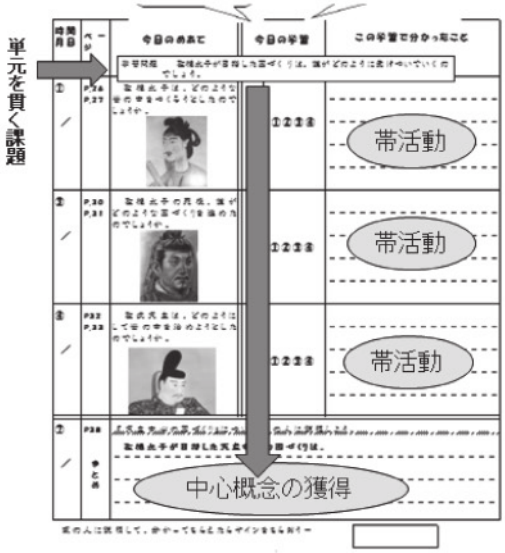


図２　こつこつカード

4　本実践の研究構想図

本実践研究では、協同学習と「なりきり活動」を中心に児童の資料活用能力を育成しながら表現力を育て、児童が根拠や理由を明示して自分の考えを説明できるようにすることを目的とする（図３）。

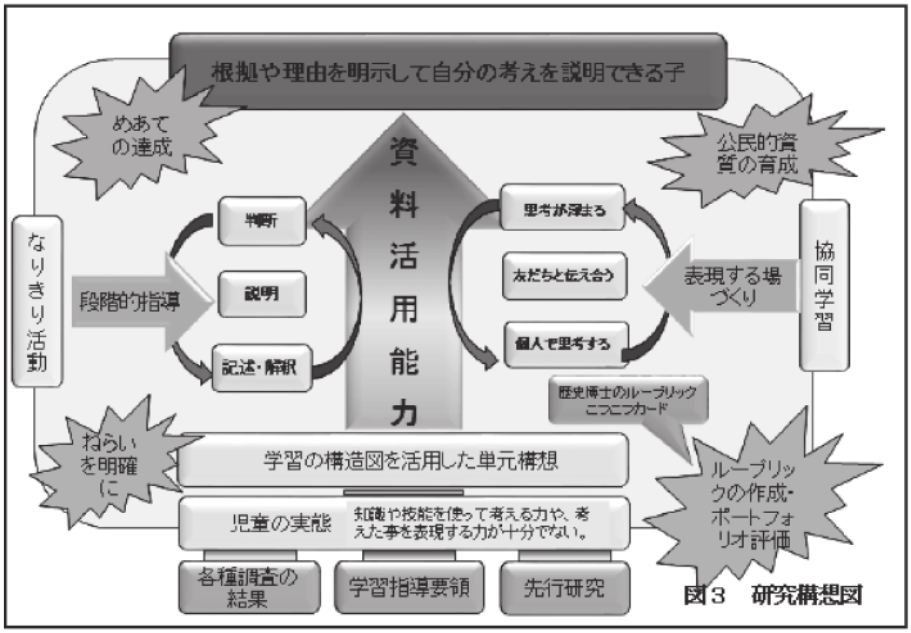


図３　研究構想図

5　授業実践の概要

本実践研究は、太田市のＣ小学校において、筆者が社会科を担当する６年生３クラス（104 人）を対象に行った（全実践は、本文参照のこと）。実践後の課題を解決する手立てを繰り返し考えながら、児童の表現力の育成をめざす。（Ｃ小学校は、教科担任制である。筆者は、５年生と６年生の社会を担当。）

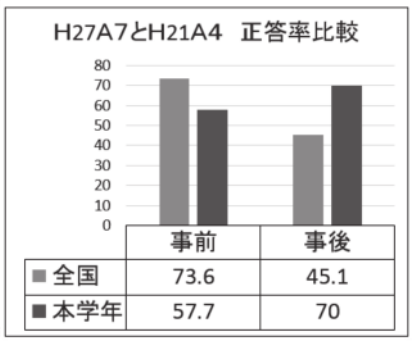
５月　（●は課題） ①単元名「天皇中心の国づくり」	聖徳太子が行った天皇中心の国づくりが聖武天皇の頃に確立したこと　【協同学習法による話合い・説明・パフォーマンス課題】
↓ ● 提示資料の厳選・グループの話合いの仕方・意見の集約の仕方 →学活「話合いの仕方について考えよう」協同学習型ゲームの実践「わくわく動物園」	
７月 ②単元名「３人の武将と天下統一」	織田信長が安土城を築き、楽市楽座や大量の鉄砲を使うなど新しい考え方を取り入れて、天下統一を進めたこと　【協同学習法による話合い・なりきり説明】
↓ ●資料の読み取りの段階的な指導（段階的に資料を増やし、児童の資料読み取り能力を向上させる。）発表の仕方・聞き方→教科間連携（共通の話し方・聞き方の設定） ●意見の集約の仕方→ 折り合いをつけながら、意見をまとめる「２学期のクラス目標を決めよう」	
１１月 ③単元名「世界に歩み出した日本」	不平等条約が日本にもたらしていた不利益や条約改正にかかわる陸奥宗光の願いや働き　【協同学習法による話合い・なりきり説明】
↓ ●資料の厳選・児童の意見発表後の全体の検討 →授業の時間配分（発表と検討時間を確保できる授業計画）	
１１月（ねらい a） ④単元名「世界に歩み出した日本」	日清・日露の２つの戦争のあと、日本の国際的地位が向上したこと 【協同学習法による話合い・個人説明】
資料の厳選（資料提示の工夫）個人、ペア思考からグループでの協同学習。協同学習後の個人思考と発表。	

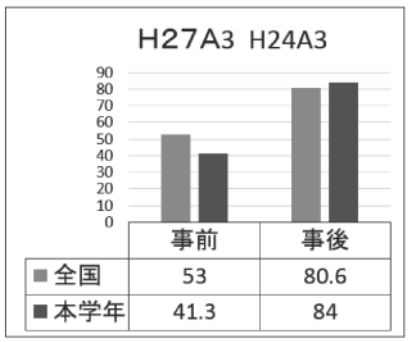
表２　実践全体の流れと各実践における課題

6　効果の検証

（１）全国学力学習状況調査との比較

資料活用能力の向上を通した表現力の向上を見取るため、平成 27 年度、本学年で正答率が低かった国語のＡ問題と平成 21 年度の「目的に応じて資料を読み，分かったことを的確に書く」設問と比較した。「言葉の使い方」に関する資料を読み取り，年代ごとの

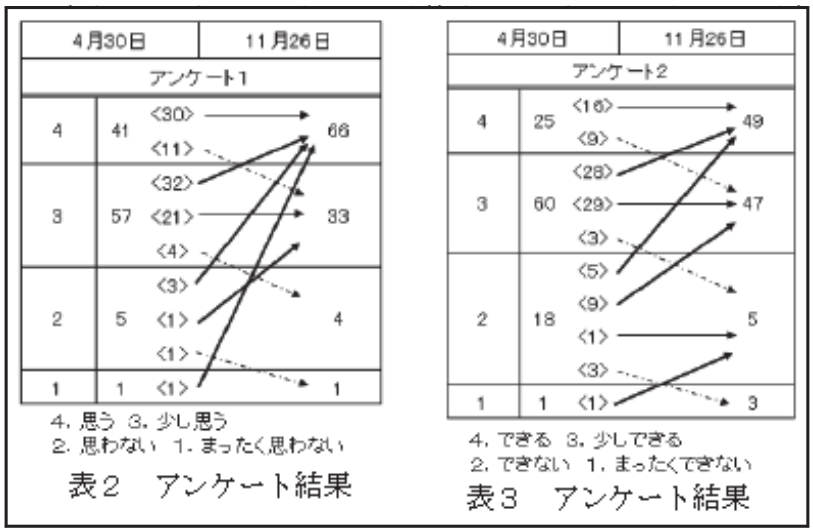




割合から分かることを書くという問題に対し、正答率全国平均 45.1 %に対し、本校の児童は 70 %の正答率であった。４月の学力調査では無回答だった児童も、表から設問に対する割合を考え、設問に沿った表現活動ができるようになっていた。また、社会科の資料活用問題と類似問題「目的に応じて収集した資料を関連付ける」でも、実践後は全国比を上回る成果がみられ、社会科の学習の成果が資料を活用して表現するという国語の表現力育成にも成果があったことがわかった。

（２）アンケートの結果

協同学習に関するアンケートを４月と 11 月に実施した。表１は、「自分でわからない問題があってもグループで話し合えば解決できると思うか」という問いに対し、４月で「少し思う」だった児童 32 名また、「思わない・まったく思わない」児童４名が「思う」に上昇していることを表している。また、表２は「それぞれの意見をもちよってグループで意見をまとめることができるか。」という問いに対し、「少しできる・できない」だった児童 33 名が「できる」に上昇していることを示している。アンケートの結果から、協同学習の有効性に児童が気付き、自分達の学習に生かせるようになってきていることがわかった。



（３）ワークシートの記述より

図３は、児童（Ｔ君）の４月からのこつこつカードへの記述内容の変容である。４月では事実のみを記述していた本児童は、協同学習での話合いや資料活用方法を知ることにより資料から読み取った内容を自分で解釈し、説明できるようになった。（２）のアンケートでも４月当初、協同学習の有効性について「まったく思わない、できない」と回答していたが、事後アンケートでは「思う、できる」と、考え方も変化し、学習課題への取り組みや協同学習法の活用の成果がみられた。

図３　Ｔ君の記述内容の変化

７　考察

（１）成果

①協同学習と「なりきり活動」を取り入れた授業の有効性

協同学習やこつこつカードを用いた「なりきり活動」などの実践を積み重ねていくこと

により、児童は短時間でめあてに沿った説明ができるようになった。図４は、11 月のＡ評価の児童のこつこつカード例である。授業中の話合い活動も経験を重ね、児童が個人の意見を友だちと話し合った後、再度個人で考えるという授業スタイルが個人の表現力を高めることにも繋がった。こつこつカードでは、90％程度の児童がめあてに沿った記述ができるようになってきている。児童の表現力育成に、協同学習や「なりきり活動」が効果的であったと言える。

図４なりきり活動を取り入れた児童の記述例

②児童の表現についての有効性

実践を積み重ねていく中で、児童は歴史博士のルーブリックにそって資料から根拠をさがし、自分の思いや考えを確実に説明できるようになってきている。授業中、歴史博士のルーブリックを見ながら、自分の記述を見直している児童も多く、根拠をもってめあてに沿った表現をすることに学習の構造化、こつこつカード、歴史博士のルーブリックは効果的であったと考える。

③他教科への転移

転移とは、ある場面で学習したことを、別の場面で生かすことである。本実践研究の成果が他教科・領域に活かされている例として、11 月に実施した総合学習の「修学旅行新聞づくり」が挙げられる。児童は役割を決めて相談しあい、それぞれの意見を司会がまとめながら、新聞作成を行うことができていた。発表を 11 月下旬の授業参観日に行ったが、児童は多数の保護者が参観している中でも堂々と新聞記事を発表することができていた。社会科での学習の積み重ねが、他の教科に有効的に働いた例である。

（２）課題

①協同学習法の活用について

４月から協同学習法を用いて実践を行う中で、児童が学習の経験を積むことで、ペアやグループで話合いや意見をまとめていくことに一定の習熟が見られた。しかし、グループでの話し合いにはまだ課題が残る。学年間、教科間で連携して低学年のうちから取り組むことで、児童の表現力の向上はより確かなものになるだろう。

②「なりきり活動」について

児童の知名度が高く、情報が共有されている歴史人物については「なりきり活動」で成果が大きく見られた。今後は、児童の情報量が少ない歴史的人物に対しても知識活用を上手にしながら「なりきり活動」ができるようにしていきたい。「なりきり活動」で知識を活用できるような、知識定着の仕方にも力を入れていく必要がある。

【主要参考・引用文献】

佐藤 浩一（編著）（2013）．学習の支援と教育評価―理論と実践の協同　北大路書房
杉江 修治(2011)．協同学習入門―基本の理解と 51 の工夫　ナカニシヤ出版